



本小2
65号
2止



下風 不ろ
 卸 不ろと和名ふ卸鞆久良於呂須萬葉等
 十五子の成やきのえ、伎里於呂之同古ふ
 ころぬ於呂須惠あろ、すゑあり舟出と
 まあまろりしをとりり
 祖母不ろ 和名於波々案大母不ほりけ
 略也姨ハ小母をほりけ略也あまは名あま
 体名とろりふすかめ事、れその流なり
 檻 不ろは和名於波之高

古事記に徳天皇御前にはとりのわらへば此
波呂須波多ハルノシハタなるはなるにす古語
て織りて天武紀下小倭文此云之頭カサ於利
和名織部司ヲリモ上野国多胡郡御
名織裳ヲリモ織ヲリモ世少をふとく
俗云又これを扱ヲリモとけあえ及ぬと
うのそりあつこの候名をさす

指サシ不フの初名ハツメ不由比フナヒ俗書オホヒ於與比ヲリモ切キ於ヲリモ比ヒ食ク
指サシ比ヒ止ト指サシ中指ナカサシ於ヲリモ比ヒ無名指ナシ於ヲリモ比ヒ子指コサシ於ヲリモ比ヒ
駢ヒラ相ヒ於ヲリモ比ヒ錯サマ於ヲリモ比ヒ伎ヒこれ物ぬとさ指サシ

つぬく具あり小指の事とありのてとあ
わともあはれはすてたのひと云事とあり
いさ

愛宕アタゴ行イま和名ハツメ於多岐山城國郡名あり
又し郡の御名同名あり於多木とほと俗云
ふとてはれありと

穩ウ也エひひめあとの同續日本紀第三十一宣
命中ミチノ云イハ心ココロ母ハハ意イ太比爾タヒル念ネ而ニ延喜式第十六
陰陽寮式追儺祭文諸御神等タビル於
太比爾 伊麻佐布

遅 ねろ 萬葉は鈍の字も同くあり第ニ
於曾能ふりれを心のおそきといふなり同九ふ
於曾也この君心上同し同十四も於曾波夜も
あゆみそまゝあせくとも早くとも世をたれ
まゝあおの人をいあししあり又於曾波也母
きつこ御まゝ人初若は驚於曾波世もあわく
とまゝかき俗もあも又抑もあわの
恐ねるは去あゝあまゝいすこ古事申ひる
襲ねるふ日本紀ふ彌於須壁言御襲あり
うしゆきゆといふこ古事記は美於須比

又意須比萬葉第ニふんやあ押日オスヒよりを
又第十四よりふが於曾伎これより日本紀
ああゆみありてあまゝと云依名の從ひ又下
出と押おも通とあはれと云

惴細本あひ 薬師寺佛足石贊歌ふ伊加豆
知乃比加利乃期止伎已礼乃微波志爾乃
於保岐美都禰爾多具霸利於豆開可
良受夜
此注ハ落句の突るりけおいす、不考也
姫 ねのふ 味名は於無奈は依の女をいふも
をんるゝもるゝいふ六老女の禰ねいをんる

つを略してつをりる名あてたの字のかゝるは
和名は草苺於無奈加豆良廿葛ヨムナカウラの平遠を

陰陽師 ねんやうし 味名は陰陽寮於辛亥

宇乃豆加佐陰於今切吳音ねんるを俗
あまるとまよしと扱とせむあはく
江沙あり

己にのし附おのつゝおのゝ日本紀飲酒餓
古事記意能賀又天智記なりな於能我
えのゝ萬葉集意乃何身志

二

々れえ同十三於能レコハレテヨレハ礼故所置而居者同十四於能
我平遠於保あるのそ又於能豆麻を
のよのよよ於吉十六ふいでのこゝ於能禮
神さひひとあれく礼を用ありおのつゝ
礼のせはしるなりおのくおのあひなる
せよとのひとのこかき俗書に扱はよそ
ほよし保名を出せり

除細本 ねく萬葉集五よあねを於伎氏人
ありしとほころくと次下の置の字は假名
ありこれふ通と

置 不レく古事記ノ倭建命ノ出ル所ヲ和賀遊岐斯
都流岐能多知 雄略紀ニふるがけニ於柯武
顯宗紀ニ置目トつル老嫗ヲをらくルはまつル
時乃レ也ヲ於岐毎クトモ又於岐毎モよ
めノ於岐毎レをきる紀不遊岐米久
良新母又意岐米リやめノ於岐米
齊明紀ニ奇中ニ飲岐氏ヲ萬葉ニ言ル五ノ多
まレの事等ツりニ意加米也トつツる宇知
意岐又ニつツる意可志なヨひテ又ちびク
を意岐トやらくルめガわらん同十四ノあいと

くヤせリき於伎氏又テ半波思今於家礼
又ツいクいキと於伎テまらん又からけケを
於吉氏又カのつまとののはも於吉十五ノ
いぬこのいわと於伎氏まめ又かくらま
髪ノ露ヲ於伎める又於久つりもニ安
倍受して又ほめ守めのいまの於家
十七ノ於伎ていくん半思十四ふえるいまかを
於吉やるまん十五於伎つりも又まいを
於伎つる佛足石贊哥よあするとのあを於
祁留阿止波又このあといんふ宇都志

於伎又二句あり於伎と云々の菅家萬葉の
於世ふ何そ、オキカ起還里草のまつとを
何とぬん古今ふあさなれはくとの山田
後撰ふ白鹿ふあふあまこの勢とれる奥
の依名に成り又菅家万葉のまつくあは
まおくろとあさなれはくとの山田
れをれ又和名に日置と云郷諸國ふたはし
越後蒲原郡但馬氣多郡周防佐波郡長門
大津郡とありあは皆於伎と云をてはれ
名ありあり同和名に韓終良 排韓肉 久良於伎
度古路

世も置のうらふとてはれ俗ちやも韓終良
てはれ

送 ねくら 萬葉集五の意久利まてして十七ふ
てはれを於久流登二十ふてはれを美於久流等
又とてはれとてはれとてはれ久利とてはれ又とてはれ
てはれとてはれとてはれ下の贈の依名とてはれ
贈 ねくら 萬葉集十の於久理よりとてはれ
十八の於久良 和名に餉 加礼比 以食送之也
てはれとてはれ
後 ねくら 萬葉集九の於久礼居而とてはれ

のへ又於久礼為氏このいづるも同十五於久
礼為氏ニミヤミヤのつ又於久礼氏とれよ
よもぬり日せよとも於久禮ぬつひれのも
又於久礼多流の口を新ま又才四よまよか
あれぬ君所贈哉とれよられハ野の依名と
そよのよ通しハ流ともことと用ハ流なり

追ハ小萬葉茅やとりつこ意比久留母能者
追牙物者也同七小鷹のちめ於敷ともゆ
あそことぬくも成追よまよとらことと追
初者馳射於無毛乃以流追物射也と用ハ流なり

凡河内あやか言味や丹波國加佐郡歸名
あれ海を於布之あ萬河内國を加不知とゆと
これ唯ぬ又日本紀よ凡と大とゆとゆと
河内國と天河内國といふ先代舊事本紀第
十小檀原朝御世以彦已曾保理命為凡河内
國造とゆり日本紀の中此氏の人香賜味
張矢張糖半あといふ人んといふ神代紀よ素
蓋鳴尊五柱男神をいふよ申の第三天
津彦根命とゆり神本祖なり又世よ大河
とゆりあかありといふ氏もといひる也

とみかゝるるものいふは信大の字と見たり
にむをまき

行おころひ日本紀才十三元恭紀衣通姫の前
くものぬらものいふを區茂純於^{オコナヒ}虚奈比とみと
流とみと

遺 おころと遊仙窟の遺の字は也とすはあり
文や物をもあさす也萬葉才十八に於許世
牟安麻波同十九に於已勢多流なるもは
もせよおころとみとこころとみかくる定ま
萬葉よふに於をうるふらり

糖煨 ねずみの味名ふ於岐比又熾の字と月菅
家方業は熾とあまのこも用らる古今物
名もあまのいと涙川おころのん時とと
流也との字は月とすあまのの熾
火也あまのいとと糖煨はあまの
いふとみは信あり

息長河にまがえ萬葉才たふあるとは
於土吳我加波はつえぬとみあり日本紀
才たはる男依等子近江軍戦^{オキナカ}息長横川
破之^ヲ延喜式の諸陵式云息長墓在近

江坂田郡とあるは息長横川も同郡ありそ
わさあつ川とあるこれあつておほいふ
かつまうらうをしく後息をせくつもい萬葉
才十四よをわぬのともやさうをいさつて妹也
よありやさうのふかあり息のせきさうの第十三
あつていぬ^{ヤサカ}のあげきともありも杖ハ一丈を
しつてもいさうをいさの勢ともありこれよ同
渙中川といふ後もいさうつまふかりつれや
長と中とすこすつて後流ありいさうつと高
葉我の字は月とも長と濁り流あり也

晚稻 何 孫 夫 木 抄 才 十八 月 何 孫 夫 志 法 の
す ぐ かの 白 妙 あり けい あり けい あり けい あり
是 月 女 え 十月 右 大臣 家 女 命 初 者 乃 詔
判 者 清 輔 朝 臣 の 方 あり 自 判 云 田 秋 十 月
つ あり あり あり あり あり あり あり あり あり
あり あり あり あり あり あり あり あり あり
何 孫 夫 志 法 の あり あり あり あり あり あり
あり あり あり あり あり あり あり あり あり
あり あり あり あり あり あり あり あり あり
あり あり あり あり あり あり あり あり あり
あり あり あり あり あり あり あり あり あり

あはれなる神に御座りしとありしつゝ
於てはしるべしなるを久しく待たざるの
字は月日なるや味あふ早稲 勢 晚稲 於久
とのありて於之補をあふひそのひも
未あひのまを何もやうかみとれぬ
和名も例あれ定てし中ひてつと中よ
といふ奥手、於之祿の別名もやとあほめ
後頼朝臣のあまねりしむらのとらぬと
あふくまふなる井ふきもあはれとあまねり
と小稲ともいふことあり
ひさしき田のともあは
あまねり教あり

勸業集よかばいさ田のともあはれ
あふりしとあはれつとあはれ

重なり 和名重下 波加利乃 於毛鍾

帯 和名武烈紀 於麻高葉才也 於此

和名於此

赴 和名ひくそひく背向あり日本紀よ背の
字とそひくそありそひくふ財をれ面
向 オモ

押 和名神武紀よ天歷神自注云歷者飲焉
崇神紀よ天皇也焉よあふしふ 於此

羅^ラ高^カ禰^子萬葉才五よとをめが佐那周の
 とを意新比良伎同十四よ於志氏伊奈等イナトの
 つものと同ちも於^サ佐^ハ信乃城古事記上の那須夜
 伊多斗遠遊曾夫良比これんさすや板戸成
 行めものあり繼體紀も穂積臣押山此自
 注の百濟本紀云意新移麻岐彌あつる
 異國の和漢記せらるものなるあく通
 しかつれとん言訛而未詳なし後を
 これんめられんものさふ引さる事味原
 鼠撃を於之と後と拾遺物名よめめ也

とくしを^カ地を^カさ^カる^カを^カん^カと^カま^カる^カめ^カめ^カめ^カ
 こそれねすみとくくめあや延喜式も押
 年高とかるゆり上の儀もよまかよつる
 萬葉才五よ於之氏流夜奈爾波能津子利
 集中生あよハ忍照押芝臨照あつる
 延喜式才八出雲國造神賀詞カムホキも大御鏡乃
 面平意志波留加志天見行事能己登久云
 かれハ一同よ於の字を用くをてし用をる
 ぬ^カ後^カを^カて^カ月^カの^カ下^カ一和名^カの^カ麴^カ杖^カ鮮^カ岐^カ於
 仁徳大皇帝紀も天皇帝の涉初も於辭氏屢

歴

あつきのさきのるのひの濱顯宗紀に載未此
云須衛於慈波羅比

中下の木

曾旅と云れ曾半と云れに旅をりてを
名之熊襲として云熊の形を天に似る
お入る王の字馬乃字ると云はて呼也
曾と云ひし一程にれひのまの旅と云

曾旅と云れ曾半と云れに旅をりてを
名之熊襲として云熊の形を天に似る
お入る王の字馬乃字ると云はて呼也
曾と云ひし一程にれひのまの旅と云
略しれらちのあはしと云らる別義し
懐香のれのおも和名久礼乃旅毛古々物名
中下のほ附とれよはさきと云はる
五百隔山いあ山高きあきよあり名あ

中下の木 中下の保

あつひたぬくかぶる山をしく古る伝
雄略天皇の御事那加須岐母伊本知母賀母
やあつひ長き鋤も五百千七くれ之五百も千也
と有り萬家よりふあつひ伊保知も我母
これも同じ之同十七朝嶺今伊保都を
里多底ともありも五百津鳥一せ之返向の
廬原を五百原と古事記にありりる昔も
了借廬を供五百とくもや七第十小廬
は五百入りかきり八百八百萬の何やふやふ
あつひかきりもあつひも多しとく

やあつひたぬくかぶる山をしく古る伝
あつひたぬくかぶる山をしく古る伝

憤し日本紀武内宿禰の事
異抄通信品之茂萬葉第九十伊伎膳保
流許已品能事

類ほ味名保又面子保と豆岐つと
いふかたつとをなすつとよ同し又後喚住留
保とあつひたぬくかぶる山をしく古る伝
とあつひたぬくかぶる山をしく古る伝
ほいと略伝を抄しりる事あり

厚朴 ほかのき味を子保に加之波乃木又
其下に直皮保を乃加波葛葉十九見攀
折保實葉ヤシ等とて亦ふも保寧我之遊と
ありほののきとかりつゝ人のみれば
委くほの保多あり
酸漿 ほかの保を木
歛咲遊仙窟 ほかの又忍咲も
火熱 ほかの日本紀
焔 ほかの日本紀ふ火徳とかをり皇子名
通 とほふ神代紀下に行去此云騰保屋

皇極紀よ騰褒囉ホ栖古事記下より後
登富禮又ありそ神富礼萬葉集五ふ
そこのつひひいて登保良世同十九ある
乃すそも等寧利氏めき也和名遠江國
長下郡郷名通能と止保利久萬と匠と貫
之蟻通の神入そあてか有りりあやも
とぬもほ有ふあ有りり思ふ下や
と遠路の中ふあまのあもるの字を申
おの院也世よとるくもあよあは
遠 とほ 仁徳紀よあつそふの等保臂等

こむ武内宿禰を世にせむせめ七命のくるれ
いふもまたあるり萬葉集五のさうこの
あまらゝ等保新又等富都比等まつくれか
に又得保都必等まつくれもの同十四か
くあはも久爾乃登保可伎又あのお入い
等保奈我伎又いもかかゝ等保曾吉奴又
あひづねのらあを佐押抱美又等保都安
布美又麻等保久能くあふあゝ注子等
保久して又かものこゝん登抱吉ちまが又
麻等保久入野おもありあゝ又この山よりや

そのよの等抱可も又等保新とあをまら
ねのあゝあゝのの麻登保久あゝあゝ
同よあゝあゝのの等保新みまゝ又あゝ
るれ等保久く敬又すあゝのの等保新
朝廷等又いもゝ等保久はらゝあゝあゝ
又等保新久爾いもゝあゝあゝあゝ
登保久さうりて又いゝ押保久して又山川を
中山るりて等保久もゝ又等保新あゝあゝ
あゝあゝ又等保久あゝあゝあゝあゝあゝ
あゝあゝの道を多騰保彌又山川のあゝあゝ

登保美これとありあを通してしつり又海京
御守保入とありて和名よ上祖止保言遠津
親の言と遠射止保遠江止保太陸奥國郡
名遠田止保古事記よ登富登富新故志
能久通と遠と一と其の國ありせよとを
しとあり又批とありてあり古流とあり
大綱とありし神代紀よ大小之魚をとな
しらくひまひとありと點と萬葉言三ふ
河登保之口ロシ言十七もれるくあり
俗よ遠白とあり

丁よありし日本紀の訓あり和名よ近江由良
井郡御名丁野の保名與保乃とれあり
和名あり
そほつ田よとそと鹿島ありとをもちあり
しなり拾遺長歌よ小山田成入よあせつと
いさなりとそほつとありとありとあり
小松の國ふとぬとありとありとありとあり
ほよありとありとありとありとありとあり
そほつとありとありとありとありとあり
紀よ物部影媛がふ備岐曾夜遅とあり

そつづかひたりき故委はと

猶 乃保儀よなきとせられくは保か
知人ぬし乃葉ハハなれおまぬ太保
之可米や也又太保之入り同古保
奈保也あらん又奈保のより又太保
之ぬのつ又奈保くさひ續日本紀
七つ今勅今日方大新嘗乃猶良比豊
明開行日在ありの道會とわを
か猶良比と借てかまらふありと
合とく院と

直相ふほひの續日本後紀第二云天長十年
冬十月癸未朔辛丑為大嘗會將修禊事
行津賀茂河禊事畢御道相幄扈從五
位已上天皇饌焉延喜式第三十二大膳式
上云神態直相俗は直禮とかくは禮なり
禮ハ其音あり社院の相々修も違り
直 乃保し質はするなりとありと云
初ハつらりぬよ之萬葉歌方五は太保
奈保命とあるは直とあり同中下奈
保那保命とあるは市のつとあり

味者武藏由是立郡御名稻道御奈近江
由甲賀郡御名山直世味保豊後由郡名
直入袴保又襦袢奈保之能古呂毛これ直
衣とわきを考ふる考いふ心に同じと
又繩とあそいふも五音通いとあるい
義あり

狂くらほ 神功皇后紀の御奇い玖流保之
古事記よ玖流木新くらりあり

蜻蛉こらりき 和名古保呂木

競きなり萬葉集よふありのれた

伎保比豆又ふ祢藝保布あり江の川又
わづら日のかりふ伎保比豆

江

纒いい 和名於盈切俗云燕尾

烏帽子 えほい味者俗訛烏者琴え
ほいいふ烏を俗人誤つて琴とい
琴の字乃音をりてえりいなり
たあふりとりとりのあひ
えも五音の字るれいなりい

夷 えり 新古今頼朝々の言ふみらの此
能名 信夫 蝦夷
いそそあふえりそめかまはくそよふ
のそあはれ陸奥よりえをさうけて名を
けりあつてもくあはひのゆあありよ
えりそめいそめいそめいそめいそめい
あり

撰 えりぬ 曾祢好忠家集・源順のよのえ
ゆもいそめいそめいそめいそめいそめい
いそめいそめいそめいそめいそめいそめい
庭道 えりぬ

疫 えりぬ 和名衣夜美まの瘧也和名同し
蝦夷 えりぬ 神武紀の言よ愛瀨詩とあり
えりぬえりぬの同類み言ふく通あり
和名地榆を衣比須祢為薬と衣比須久
須里决明を衣比須久佐昆布と衣比須世
とあり 魚酒とあり 依名えりぬ
中下の江
嘶いそえ 和名よ以波由とありゆよかすいそ
江のりいそいそいそいそいそいそいそいそ

とりの馬とてはあつた以奈久もあつた馬は
初子の勢は出でなくおるが萬葉集
よもも馬聲とわかれ伊と義川せりし
くさいのまふしつゝえり又とりあつて
牛犬皆ほめしりあはとわつ通とれつゝ
えつりえの義れ

花宴 くらゐのえい 宴 旅見切

鶯 はえ和名よ波江あきあつれい中と通と
黄 くらゐ顯宗紀云黄此云波曳萬葉才
二よ川源とわかれ波由流同十四よわら

いそ手れえ 伴 要須礼

吠 ほえ 和名よ保由江とゆゝ海子これと
大のりゆえ

藤 ひこええ 和名よ比古波衣

鶴 ぬ江 和名よ沼江古事記の奴要萬葉
集一よ、奴要子鳥とあつち五才十と

轅 あうえ 和名よ奈加江長柄の義あり
笛 あえ 和名よ布江繼體紀の府也

あえ 萬葉集八よ百枝刺於布流攝玉介貫
五月半近美安要奴我介花咲介家里

第十。水草花の阿ア要エ奴ヌ蟹カニ第十八攝邪
 乃由流實波多麻尔奴伎都追トあり
 俗よ血をあやとせしつとカニの字和名ふ
 昂ホウ植シ反訓安不一云阿倍毛乃カニ擣キ薑シ蒜ス
 以醋和之とありしん薑蒜と擣合せぬ
 常ふあへりカニのよカニのカニ和カニの字をむしぬ
 じろほカニとせぬカニの字の雅せを安布
 とのカニを安由留カニといふカニとカニ但阿布
 留カニと安由留カニと同義とて通カニ阿部毛
 乃と阿要毛乃と同義とて通カニとればは

あえりのとありカニとカニ萬葉カニやカニふカニ
 一カニ花カニ今カニ大カニ遠カニ越カニ賣カニとありカニのカニありカニふカニ
 とありカニ又カニ十カニ凡カニおカニ春花カニの今カニ大カニ要カニ盛カニ
 高カニとありカニ上カニと同一カニとありカニふカニ下カニと
 同義カニとありカニ下カニふカニ准カニとありカニ下カニと
 ありカニとありカニのカニありカニ

首物(あえりの)の日本紀第十應神天皇紀
 首カニ此カニ云カニ阿カニ敷カニとありカニのカニありカニふカニ下カニとありカニ
 源カニがカニぬカニれるカニふカニあカニえカニのカニのカニとありカニのカニありカニ
 あカニえカニのカニありカニふカニ下カニとありカニのカニありカニ

とあるも萌ふ回し音の下めなるい伊を
れつあいつえとの中のいえの通のせむゆに
よの中あそかぶるあめつそつらほふえ
かつねとあ中音の通ふじふりかひのふと

榮螺子 けつえ 和名ふ佐左江

蕪 けつえ 和名ふ比衣萬葉字十二比要

鴨 けつえ 和名ふ比衣土甲

飛簷 けつえ 和名ふ比衣無

道遠 せつえ 志遠切 遠翼招切

楚 すんえ 和名ふ魚條のりふ魚條讀 須波 夜利

本朝式云楚割此和訓の意須波和利を
ととらりといひのふくまをよ和夜也
和同類ふく通をいひのめはつとと
すんえといふ魚をすんえのこしとて
會ふ魚條のりふといふあり

魚

餌 和名ふ惠同又屠兒惠止利 注屠牛
馬肉取鷹鴝餌之義也云日本紀
少河内國志紀郡餌香といふふあり

衛我多惠我ともかぬあり順家集よま
りし事を二首の上下にかきよまぬるを
るをよりよあつる言ふ^{あつ}のよるつるを
あつるよりのゆゑなるをよるよるを
よるよるのゆゑ

會之 胡外切今ハ吳音なり

繪之 胡擗切け吳音なり

詠之 命切漢音なり 吳音ハおやとる

やうる

榮華 之いと 榮 為明切

槐 之子 和石子惠介須

犬 之ぬ 味名子惠沼 狗尾草 惠沼能古久作

俗よわの子を之のこゝもあぬの古此略之

離 之は 某師寺佛足石贊歌子 伊波介利

都久 一云多麻介惠利都久 味名子工近具小

鈿 加布良利 曲切 鑿也

笑 之む 上の梁のりよ引いゝ古事記よ惠

美さかえそあり萬世あふむ多しこれよ

世ふも色と見せハ煩しよあひよと和名子監

健久これよぬ時くるよあのおもれを咲窪

あれハ華と薙定と音訓異るれけと云々
いふ回し

鞆繪 いりえ 志名江次常月より

机 つくえ 味名木器類の都久恵同文書具

の書案不美都久恵 江を月か

杖 つえ 萬葉第ふ多都可豆恵千束杖

あぐさ杖のいり 味名都恵横首杖 加勢 都久

又鹿杖 加勢 都久 又鑼 加奈 都久 農具子鑄 佐比 都久

殖 うゑ 神武紀ふ天皇の御方ふ宇恵志

波餌今瀬古事記ふ宇恵志波恵嘉美

又古事記ふ宇恵久佐萬葉第十四のいり不

のぬるに宇恵古奈宜又宇恵多々氣第

十五のいりの宇宇流田者宇恵まふこれ

いゑうぐさかありせよいふとかな

同十七のありとつふ宇恵いり古事記ふ

御真津日子 訶恵志祢命 これ日本記ふ

觀松彦香殖稲尊とあり孝照天皇入

たの御名ゑハ宇恵の上略めく殖の儼名

あり又御真木入日子仰恵命ハ山宗神天皇

の御禰御間城入彦五十瓊殖尊の當り

意上不同一宣化天皇の沙子上殖葉皇子を
古事記にハ惠波王とあり日本紀にハ伊賀國
積殖山口とありハ和名ハ河拜郡拓殖とあり
同ハ之れを倭姫世記にハ伊賀國敵都美
惠宮とありハ之れを天智天皇の御宇に
藻塩とありハ之れを天武天皇の御宇に
拓殖とありハ之れを天智天皇の御宇に
和名ハ山城也久世郡ハ殖粟郷とこれハ
後名のほありハ之れを阿波國名方東郡ハ
同名の郷ありハ之れを惠久利と名ぞり武藏國

足立郡殖田^宇阿波國那久麻殖を平惠と
記にハ播磨國小田郡土佐國長岡郡ハ殖
田郷と共ハ宇惠多と記にハ之れハ上
りりハあれハ之れを後名成にハ之れハ
後名成と名ぞりハ殖粟をハ之れハ
可ハ後名成ハ之れハ世の後名成得れ
事と名ぞりハ之れハ

飢^コ神武紀ハ天皇の御宇ハ初列破
柳隈奴^コ之れを古名と記にハ和礼波夜惠奴
とあり我早飢^コ奴を古名と上略して

由急命妹をぐりし又わ由急よりしを
又かぎれぬぬおれよ久しく待てゆき
あゝ〜

居 といふ萬葉中云ふあるささのりには三輪
須惠同十代よとてそのありふ毛利敬原忠
十七ふ伊波比倍須惠都回中みふとくゆひ
須惠てそ我かよ直白部のしり又わ〜を
乃ま〜りのしを屋カ余須惠同代ありふ
しるふ船半宇氣須惠又あり津よ船半
宇氣須惠初ふ陶頭久流乃居物作の

急あり礎^以順家集ふ未を上下よ急
二首あてあまのしり中ふ急を上下よ急
初上入舞のあふ出せりそそその向ふあ
あふす急を有又漢古を集ふ後鳥羽院入
ゆふはは〜と急の系つ〜
神武紀よ選^イ我^イ極^イ卒^イ与^イ麴^イ雜^イ居^イよ
とわ〜急ありあ〜すゆ〜か〜い〜
れ〜

中下の

家いゝ味者ふ伊関萬葉第五子伊弉那
良婆也外萬葉和名ふらの彦根ほし
は中しと再世ありまればよきとかくくあり
あつそいゝせ火ふたぐとわかぬよまの
あつそ也

蠅はへ和名波閉

攘と云和名波閉岐今つらまきと云は
苞直に神武紀ふ珥倍和名波保途陪と
なりり姓和名伊計通倍生勢の之也

にへ萬葉第十回いゝわらうのわらうわら

秩父にて毎年三月
廿四日あり
とよみあり村中
をこしむれはら
男一人つらこは
このまじり火研
ふかふか女は
ふかふか
もくもく
勢もくもく
やるえん

爾倍と云そのわらと云ふと云は
とれは田の出れと云ふと云は
ふらふら時節のつらと云ふと云は
あつそと云ふと云は
ふらのまじり
にへりしと云ふと云は
爾はひの略なりと云は
郡の脚名と云は
はつねと云は

皇代の初めは、
その時に、
新嘗を以て、
その時に、
新穀を御食應
す。その時、
天稚彦新嘗
休^レ之^ル時也。と云ふ人代は、
天子の新
嘗會と云ふ事。

方、
萬葉の初め、
菅家萬葉の初め、
河原信行と云ふ人、
あり。佐江の子、
あり。

柳か、
吐名、
加信、
佐よ、
か、
と云ふ。

堤は、
た、
と云ふ。絶、
た、
と云ふ。

蹇、
と云ふ。和名、
那間久、
又阿之奈間左傳
云、
光為、
足^ミ、
説文云、
蹇、
行不正也、
と云ふ。
や、
と云ふ。行、
意、
と云ふ。足、
痿、
と云ふ。と云ふ。と云ふ。と云ふ。

望、
と云ふ。和名、
字、
信捕、
魚、
是、
轉、
と云ふ。と云ふ。亦、
和名、
佐間、
都、
流、
往、
方、
ゆ、
と云ふ。け、
真名、
萬葉、
と云ふ。あり。同、
事、
と云ふ。

由久弊新良補婆昔家萬葉小濱りり
往邊ユリもあしと俗ふゆきをかくは流り

中下のわ はの子りあうてき使わとせゆり
しあふりあふとたふりて和名子
要うとせゆ

結草 かくのあし 和名ふ加久乃阿和江波第
よ加久繩古今集の長初ふかくあふふ
思ひふれとともあふ江波の意也
かくのあしを乃阿切奈るれんはしあしは
加久左和なれを和名者より沫の和名

阿和なれ河波もみと道まへに和れも
か久阿和との間ふ入の字あし六繩の
言ひあめしり知

撓 ぼくし萬葉第六よ半弱女の念多和美
手とよあふ又第十よ枝毛多和和とあ
ふたふひるり又古事記依建命の心初
煩曾多和夜賀比那遠麻迦半及波と
あふをたまふも細くはるるる時カサり
はるるをれをうりり骨のやうふ
はあはたつともあつくとんちるえられ

又皆同

浦回

和名伊勢国郡名河曲和波同国

度會郡御名並曲和波乃曲の字子名同

磯回隈回等同又萬葉集四下浦等とよ

わがる等名のありまかれるゆえに

いふ同しすをよとよをよとよあるも同し

鞆くさのみくろ 和名久乃久都

烏芋 和名久乃久和井

粍 和名久乃久和都良俗之久都和

蕨菰銜 和名具都和くろをひしを新勅

撰物名多小かきみくろのひら田の

とるもの、保又にくろ 鑢久都波美俗云

久美一名勃馬、甲鐵也、鑢、總て

鑢、別有り、今河海ふくろをひしは

總別混、あるは

理、くろ、萬葉集五下かくろ許等、和理

第十五のねの已等、和利同十八よりこの

よ入許等、和利止十九より二句あり、

くろ、くろ、

大語、くろ、くろ、真名、遊仙窟、あつてか、傍り

六帖第一の字は...
乃のつういふことなるや...
のみるれ...
さあかすの...
ふれ...
たの...
たの...
たの...

沫 ある 萬葉集十下 水阿和 和名 沫電 阿和
古事記は 八千弐神 并 小沼阿比 高入 心 阿和
和名の 体 文 の や... 又 和名 硫黄
を 由 入 阿和... 湯沫... 又 白鹽... 阿和

之 保... 沫... 以上 皆
ある... 萬葉集... 安播...
あり... 通...
騷... 萬葉集... 同 三
味村 左 和 伎 同 五... 佐 和 久...
と 同 六 白 浪 左 和 伎 又 浦 浪 左 和 寸 同 七...
赤 石 門 浪... 佐 和 久... 同 四... 佐
和 久 日 本 紀 第 十 下 佐 和 佐 和 珥 舊 事 記
并 古 事 記 佐 和 佐 和 途... 同...
く... 騷... 又 日 本 紀 萬 葉

等々さるくしと云詞のこころは同類のさるく
神酒之由 和名ふ美和萬葉第ふ三輪
波 和名ふ之和萬葉第ふ五子ゆりての
よふしつくりゆり新和名ふしりししつくりゆり
しつくりゆりしつくりゆり
居 和名ふ 假名末考但し急すしつくりゆりの
しつくりゆりしつくりゆりしつくりゆり

中下のは地はまづし中ふ候はゆりぬこれ
米櫻 和名ふ波加一云途波依久良

一名六櫻桃一名合桃今俗よゆりしと云地
別ふにさるしと云物ありしと云地
舊事本紀古事記延喜式等ふ岐遊遊し
しつくりゆりしつくりゆり

はえ 海上の剣なり 萬葉第ふ三子庭好ありし
やも船雨ありしと云雨波もさるしと云
同十子庭^{ニハキヨミガキ}津奥方傍出^{ユキイッルアミ}海舟第十五も雨
はしかり庭ハ假名なりしと云海上の浪
ありしと云平垣ありしと云庭のこころなれは
てやそ正字よ月ありしと云第十九よ

氷の上のつらゆきと舟の人とていふと
おしくめり 孝謙天皇の清和天皇の御時
萬葉より邦より古き物よりよしとて邦の御
おまんふるあるし 世より和かくは俗の志
ひさし言あくと又ゆえたるなり

片羽かたん くらふ物語よきふけかてえ
ともありなりと世有るくともあすの御よ集
名をかきつるの御よふ合せたるなりかてえ
いふよの片羽よふ片羽なるは用をれ
とていふてえなりとれは石集よ尼々二人

ともあつて大津とさなるの車の片輪あつて
ひんて一人といふは車は大乗なりねども
ありといふは車は回にかたきがあるか
ひのたれは一人がさすしなすらぬの
ありいそはくこのまわしむかひの
なされはゆるりといひのちのちの車の中
車の片輪はよふ用ありおるはこれと
いふれはよふはかたきといふ御よか
いふかたきのまわらぬは上伊勢物
語ありかたきといふはよふはねのち

物語のついでにのふくはるふいぬかかん
團扇うらりて 和歌ふ字知波

中下のう

僧ほ〜 これ日本紀よりある法師の
二音と和語よりあり 法は色にて三音
あつて法性法燈なるに時あつてつひに
ありかゝる理をわしむるも 玄蕃寮
のよき保字之萬良比止乃豆加佐とあり
玄蕃の僧と蕃客とをわすらするなせを亦

保布のくわんりものせんをよいかみき取
あつたや法の三音のついでに
十日とてり景行紀の連綿ふ昔塙伽を
上事記よの登之哀加とをこれ帝の事あり
和ふ五音通してとてかもしつてを深瀬
門の事ありまのひつりて尾張のり
あまのひの事ありとてりあつてあまの
しあまの事ありとてりあつてあまの
侍り〜 彼由尾張のこゝなり
急居つさう 宗神紀此の云 竟岐字一

自注ありついでと云細るなり

陵苔のせり味香ふ農世宇せよのせん

ついでと云也又の和え未加夜木

意字テれりわなは旅字と原を出雲国郡

名あり萬葉中曰ふ出雲守門部王の命

鉄字の海入塔千入りの片方の思ひや

ゆらんたのふぐそをさすゆにこれをこりて

原のひみつとまんのわくの海は塔千の

れいさうのむら⁴せのみはまのふい海又と

あまめとをれくのいさふあふおん

和語中よりありあまのあまの奥海と

名はくもはくはくはくはくはくはく

うふやれれとくはくはくはくはくはく

うしちあせりるり¹と名はくはくはくはく

ふふはく萬葉古伝よ右門部王任出雲

時聚部内娘子也萬葉の西のよはくはく

あまうはくはくはくはくはくはくはく

休あふらうもはくはくはくはくはくはく

又同はくはくはくはくはくはくはくはく

鉄海のかりのちとらあはくはくはくはく

かゝらわゝらあしとくあるゆふ出とらうり

甲香かあり 和名ふ合講の二言

塔地盡たふ

貴にふと神代紀下卷玉依姬哥ふ多輔

好句ありりりそれをさすゆはふ多布斗久

かしてり萬世重身五ふ父母をんれふ多布

斗新同十七ふひりりこれをいれふ多敷刀久母

安流香茅師寺佛足石賛歌の中ふりり

師はつひのふあはあひひのふのふのふ

師多布止可理りり

脇息 げあき 脇は虚業切

上路 ありき 和名ふ布と木

甲 ころふ和名ふ俗言古不加布るるを古不

をり

劫こふ

業こふ

鵠こふ和名古布一若久比

障泥あふり 和名ふ阿不利

しつと通する類

諾

しつ 和名ふ郁子隣菅家萬葉子此
郁子を借てかせなまのしつにの御
神武紀ふ諾此云宇每那利仁德紀ふ
武内宿禰のふよ千信ナ信ナ信ナ信ナ古
事記下卷ふ宇信萬葉第三第六ふ
古事記を同くかきり日本後紀ふ平
城天皇のしつふさる人のふふふふあり
くはふ信いらふく自のふをりしつ
荆うつゝ萬葉字ふみりのの宇萬

良能宇礼よこれありまのふれふふに
宇波良と宇萬良とあり和名ふ藤藤
銜野都根宮實無波良藤波良藤波良
菰葉波良藤波良藤波良藤波良藤波良
とあり上のしつむけむむむむむむ
なぐらふありふありふありふあり
ふあり

馬

しつ 和名ふ無萬圍人加無既無牧
無萬 駿馬土岐無萬又駮馬須久礼太留宇萬駮馬放曾岐
驛馬波祢驢宇佐岐駱駝乃無萬驄馬

宇と字と通する類

は馬音いへんや身を梅の義ありや
ちんを揚を疑とかけふま回しと
字木汗木字梅有木干梅りしかんや梅
とかけふや一首の目しと實本よハ字梅
あしに池を例とまおつし第ハ第十第
十七より九重えあおられと解りまねる
あしんを字集物あふやを強めえあなる
りふつひあつてくもんぬれとひあつ馬
音あまのつ順あ集にも西田集文源中
御書のともあふあうりつをねりてとて

梅は川にのりぬるをあれいのちあむ
んしひあそこあふふしひあさ
のこちんあしひざり音源のこよとれ
あやあんじあといあさるのあふあ
とらしくあしあつしあ若よふあふ
あふあつてとあふあ

筵
さしらの萬世あ第ハハ伊太字字の呂河向
さしあふの稲筵河さつしあこれ
音便はまらうりつとあふ

元禄十一戊寅五月初八日 契冲速作

寶永四年五月上旬一校畢

和字正濫要略畢

此書ハ空無沙門契冲所述作也往昔
著和字正濫抄五卷しんもの古書を引
證して哥道の便とてあつらふ武江の佳
擧成貞といふ人知字通例書八卷
成ありしとて新古の假名をまよへし
正濫ハ謄録せしめしりれりしとて
はよりし師古書ふらり古書上旨を以
書し其子のしぬの正濫おも流せし
記をてて古人の定ぬらり候名成た
ててみありし候ふとてしりしとて

此書の中ふらんやうなるものあり

千時寶永六己丑正月於六波羅密寺追一校
畢

洛東隱士 似閑

享保九甲辰年孟秋中院写字 某

此書の中ふらんやうなるものあり
千時寶永六己丑正月於六波羅密寺追一校
畢
洛東隱士 似閑
享保九甲辰年孟秋中院写字 某

Handwritten notes and stamps at the bottom left of the page, including a red seal and some illegible characters.

